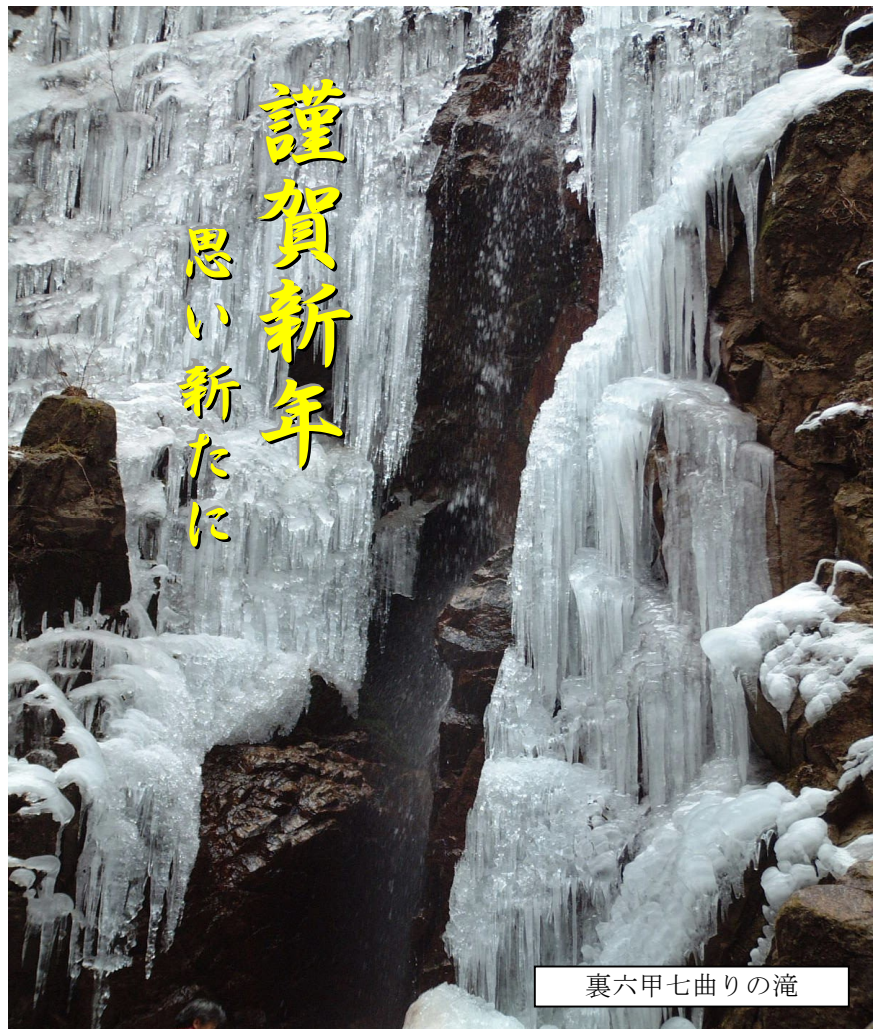


近年にはめずらしく厳しい冬の幕開けとなった。たしか 10 月頃の長期予報では、『ことしは暖冬の見込み』と報じていたが、その後『寒い冬』と修正された。12 月としては記録的な寒波の襲来となった地域も多かったと聞く。世界トップのコンピューター【京】を持つ技術立国であっても、長期気象予報には手こずるらしい。昨年夏の猛暑の中での節電につづき、今度は震えながらの節電になりそうだ。日本経済の冷え込みに追い打ちをかけてくるのか。



裏六甲七曲りの滝

思えば神戸の地であっても、年末の餅つきは雪の中だった記憶もあるし、かつて阪神間の山仲間の間では、冬の「裏六甲四十八滝氷瀑めぐり」は冬季を通じて人気のコースであった。当時は凍りつくのは滝ばかりではなく、川床一面が凍りつき、アイゼンをキシキシ食い込ませながら登ったものだが、川面より滝の方が先に凍り付いていたと思う。

流れ落ちる滝が川の水より先に凍るのは、落下するときに冷却空気に触れる面積が大きくなり、“過冷却”となった水滴が滝の周辺から凍って重なり、次第に大きくなってやがて滝を覆っていくらしい。だが寒気が続かなければその前に融けてしまう。

あれから半世紀、今、奇跡の星“地球”は温暖化が進み、ここ六甲山でもこのような芸術的な氷瀑が見られる日も徐々に少なくなるのだろうか。

豊かな生活ならぬ便利な生活と引き換えに突き付けられた温暖化現象、その分人の心は寒冷化してきたわ…ではしゃれにもならずあまりにも悲しい。

新年を迎え、凍てつく氷瀑の姿に心身を律し、思い新たにこの一年の歩みをはじめたい。

(ひしのも 128 号 写真と文 菅田忠)